

飛騨農林事務所の普及活動状況（令和5年12月31日現在）

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■新規就農者・家族経営協定締結者等 飛騨地域での多様な担い手支援

飛騨農林事務所では、「岐阜県方式」の担い手育成を活動の重点に位置づけ、様々な支援を行っている。

12月は本年度の新規就農者18名を対象にした「新規就農者激励会」、家族経営協定締結者7組の「家族経営協定調印式」、就農研修生13名が学ぶ「飛騨就農支援塾」を関係機関と連携し開催した。

市村の就農支援協議会、県、農業士等が役割分担しながら協力して行事を進めることで、飛騨スタイルの支援体制を作っている。今後も、着実な体制を維持し伴走型の就農支援を行う。



【新規就農者激励会】

■「ひだあねさ特産グループ」 視察研修会を実施

12月11日、飛騨地域の女性農産加工グループ「ひだあねさ特産グループ（通称：ひだあねさの会）」の13名が、岐阜地域で加工品を販売する2カ所を視察した。

「山県ばすけっと」（山県市）は2021年7月にオープンした直売所で、多数のオリジナル商品が販売されており、開発の経緯などから商品づくりの事例を学んだ。「はなのかファーム」（瑞穂市）では年始のハボタンの出荷に向けた作業を見学した。

農業普及課では、引き続き6次産業化に取り組む女性農業者の活動について、関係機関と連携し支援していく。



【ハボタンの出荷の見学】

■担い手 重点支援対象者を支援

飛騨地域では農業経営者法人化等総合サポート事業において、経営面の支援が必要な15経営体を重点支援対象者としている。

12月12日、専門家として派遣された中小企業診断士、ぎふアグリチャレンジ支援センター担当者と共に、2経営体を訪問し、経営状況の聞き取りや今後必要な支援について検討を行った。

経営体ごとに課題は異なるが、専門家を交え検討を行うことで課題の洗い出しができ、今後の取り組み方針が明確となった。

今後も専門家やぎふアグリチャレンジ支援センターと連携し、農業者の経営に関わる課題解決に向けた支援を行う。



【中小企業診断士によるヒアリング】

■高山4Hクラブ 勉強会を開催

高山4Hクラブは、高山市内に住む若手農業者の組織である。現在41名が会員となっており、勉強会や情報交換を行っている。

12月19日、高山4Hクラブの勉強会が開催され、「インボイス制度」について税理士事務所の大林先生より講義を受けた。10月から変更された制度の仕組みや、販売先の違いに応じた適切な対応の方法など細かく説明いただいた。参加者からは「今回の講義を受け、もっと勉強していきたい」との声が聞かれた。

農業普及課では今後も勉強会や情報提供を通し、高山4Hクラブの活動を支援していく。



【税理士による講義】

■水稲 担い手交流会を開催

12月20日、JAひだが主催となり、担い手の経営を支援しようと、「水稲担い手交流会」が開催された。飛騨地域（高山市、飛騨市、下呂市、白川村）の2.6ha以上の担い手94経営体を対象とし、約40名の農業者が参加した。大型の担い手が一堂に会する初の試みとなった。

農業普及課や全農、資材会社等が、今年の生育や雑草の対策、スマート農業等のテーマについて講義を行った。会場には、ドローンや大型規格の肥料・農薬等の展示ブースも設けられた。

農業普及課では、地域再生協議会やJA等と連携し、担い手の生産や経営安定に向けて支援を行っていく。



【今年の生育について説明】

ぎふ農畜産物のブランド展開

■夏秋トマト 飛騨トマト全体栽培研修会において実証試験の結果を報告

12月1日、飛騨野菜出荷組合トマト部会が主催する飛騨トマト全体栽培研修会が開催された。

農業普及課からは、灰色かび病を減らす効果が期待される果房裏の摘葉処理について、今年度、現地で行った実証試験の結果を報告した。

生産者の灰色かび病対策に関する関心は高く、摘葉処理のような耕種的防除法を含めた総合的な対策について引き続き検討を続けていく。



【実証結果を報告】

■夏秋トマト 独立袋栽培研究会総会および反省会

12月15日、夏秋トマト3Sシステム導入者が中心となる独立袋栽培研究会の総会および反省会が開催された。

農業普及課からは、各生産者が測定した生育、給排水の管理データを取りまとめ、今年度の傾向について情報を提供した。生産者は日々の管理を振り返り、生育が良かった要因や効果的だった萎れ対策など、次年度に向け活発に意見交換を行った。

次年度も農業普及課は、新規導入者を中心に給排水の管理の実践や生育調査を支援していく。



【栽培管理について意見交換】

■ほうれんそう 飛騨ほうれんそう反省会

12月に高山、丹生川、清見・荘川、高山南、吉城、高原の各地域において、ほうれんそう部会反省会が行われた。

本年度は雪解けが早く作付け開始が早まったが、梅雨明け以降の高温による管理の難しさから、昨年に続き出荷量は少なく推移した。

これを受け、農業普及課からは、高温に対応するための栽培技術について研修を行った。さらに、本年度に実施した土壌病害のアンケート結果についても説明した。

今後、部会員の個別面談において、安定生産の技術を普及していく予定である。



【次年度に向け反省会】